よいことのために手を取りあおう
Rotary Club of Toyohashi North
CLUB WEEKLY
ROTARY CLUB OF TOYOHASHI-NORTH

2025～2026 年度 RI 会長メッセージ	UNITE FOR GOOD よいことのために手を取りあおう	豊橋北RC 会長テーマ	利他と言う高みに登る為に 本気でやるべきことを 皆でやりましょう	2760 地区

例会日＝毎週火曜日 12:30　例会場＝ホテルアークリッシュ豊橋　会長　髙坂泰弘　副会長　酒井和良　幹事　川口和樹

豊橋北ロータリークラブ　〒440-0075　豊橋市花田石塚 42-1　豊橋商工会議所内　TEL〈0532〉53-1000　FAX〈0532〉53-6447

第３２２８ 回例会　　10 月　21 日〈火〉　　vol.70　No.11

ゲ　ス　ト　：　川又米利氏(元中日ドラゴンズ選手)
ビ　ジ　タ　ー　：　豊橋ゴールデン RC(2 名)　　以上 2 名(サイン人数)
出　席　報　告　：　会員 58 名　欠席 16 名　出席率　72.41%　前々回修正　89.58%
ロータリーソング：　なし　　メニュー：　洋　食

会長挨拶・報告

髙坂泰弘会長

本日は本年度初めてのフォーラムです。たまには雰囲気を変えて、フォーラムらしくカジュアルに話し合える場所として、emCAMPUS 選びました。

本日のゲストは中日ドラゴンズ一筋を貫きました川又米利元選手です。小森宇生也職業奉仕委員長の働きかけで本日お越しいただいた訳ですが、お二人がどこでどう繋がったのか見当もつきません。小森委員長、恐るべしといったところです。

野球といえば、メジャーでは大谷翔平選手が異次元の大活躍をしています。彼が実はエイリアンであると言われても、信じてしまうような活躍ぶりです。

そして今年は豊橋も一段と野球に熱が入った夏を送りました。地元の豊橋中央高校が甲子園に出場し、しかもその立役者である一年生選手・中立大翔君のお父様が私達クラブのメンバーだったということで、熱くなったのも当然でした。

野球を職業とするということはそうそう簡単なことではありません。人々に夢と希望を与えられる素晴らしい職業ですが、それを見えないところで支える困難も人一倍あったことでしょう。川又様は野球という職業を通して周囲に幸せを与えるという任を背負ってここまで来られたと思います。そういったことも絡めて、お話を伺うことができればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【マルチプル･ポール･ハリス･フェロー　バッジ贈呈】
河合芳光会員

【米山功労者マルチプル　感謝状贈呈】　酒井和良会員

幹事報告

川口和樹幹事

豊橋東 RC より。11/23(日)開催の地区補助金事業･中垣内祐一氏講演会のご案内がありました。申込方法を掲載したご案内を既に配信しておりますので、参加を希望される方は各自お申し込みをお願いいたします。

例会変更

10 月 29 日(水)　豊川 RC　豊橋東 RC
10 月 31 日(金)　新城 RC
11 月 4 日 (火)　豊川宝飯 RC
11 月 6 日 (木)　田原 RC
11 月 11 日(火)　豊川宝飯 RC　田原パシフィック RC

例会休会

10 月 29 日(木)　渥美 RC
10 月 31 日(金)　蒲郡 RC
11 月 3 日 (月)　豊橋南 RC
11 月 4 日 (火)　田原パシフィック RC　豊橋北 RC
11 月 7 日 (金)　新城 RC

委員会報告

ロータリー財団委員会　　安達道行委員長

①藤井寿彦会員より 180 ドル、越智成幸会員より 100 ドルの寄付がありました。ありがとうございました。

②次週の例会は豊橋技術科学大学特命理事･副学長、電気･電子工学系教授、技術科学イノベーション研究機構長の滝川浩史先生をお招きし、「国立大学法人豊橋技術科学大学 50 周年にむけて」というテーマでお話をしていただきます。

米山記念奨学委員会　　**藤城寿彦副委員長**

越智成幸会員より 1 万円の寄付がありました。ありがとうございました。

豊橋北 RC 奨学金基金　　**藤井純一委員長**

岡本敏幸会員より 1 万円、八木基之会員、下山暢子会員、川口和樹会員、小森宇生也会員、河合成高会員、杉野公郎会員、小林利生会員、辻直樹会員、藤井純一より 1 千円の寄付がありました。ありがとうございました。

ニコニコボックス　　**伴俊樹会場副委員長**

安達道行会員	9/28(日)2025 年豊橋青年会議所の事業として、豊橋総合動植物公園に 20 年前に埋めたタイムカプセルを掘り起こし、無事に皆さんの手紙を取り出せました。当日の様子は地元新聞社、東海テレビの夕方のニュースで取り上げていただきました。
小森宇生也会員	本日の例会を担当させていただきます。よろしくお願いします。
河合成高会員	10/12(日)、終戦 80 年の節目ということで靖国神社にて手筒花火の奉納を行いました。豊橋祇園祭奉賛会としては 6 年ぶり、戦後 5 回目の靖国手筒奉納となります。今回は82本の手筒花火を安全に奉納することができました。
小林利生会員	サンクス奨学生のファロ君の就職が決まりました。私の会社と同業のフジッコに決まったのでびっくり、嬉しい限りです。
髙坂泰弘会員 川口和樹会員	川又米利様、ようこそ豊橋北 RC へ。ご来訪を心より歓迎します。ドラゴンズ一筋現役 19 年。その後の解説者、コーチとしてのご活躍についてお話楽しみにしております。

本日のプログラム　　**担当：職業奉仕**

小森宇生也委員長

本日は職業奉仕委員会担当のクラブフォーラムです。職業の一つ一つが社会に貢献しているということは重々承知されていることと思います。今回は我々とはなかなか縁が遠いであろう職業、色々な人達に夢や希望、感動を直接与えている職業の一つである「職業野球人」の方をお招きしてお話を伺いたいと思います。こういった方々がどのような体験をして、どのような思いをしてやってきたのかといったことを伺う場を設け、皆さんの一助になればと考え、企画させていただきました。

本日は中日ドラゴンズに 19 年間在籍された川又米利元選手にお越しいただきました。川又元選手のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。

川又米利さんは 1960 年 8 月 4 日のお生まれで、東京都のご出身です。1976 年、早稲田実業学校高等部に入学、1 年生時から左翼手、一塁手として活躍されました。2 年生の春･夏、3 年生の春･夏と、通算 4 回甲子園に出場されています。

同じ早実の出身の大先輩には王貞治さんがいらっしゃいますが、川又さんも同じく左の強打者として活躍されました。先輩の王さんになぞらえて、「王二世」と言われていたそうです。

その後、1978 年オフに中日ドラゴンズに入団、19 年間中日ドラゴンズ一筋でご活躍されました。1997 年に引退された後、2002-04 年に中日の二軍及び一軍で打撃コーチ、2012-13 年に二軍打撃コーチを務められました。

川又選手は現役当時、打撃フォームの美しさに定評がありました。映像を準備しましたので、ご覧ください。

≪映像上映≫

本日は川又さんに、私が準備した質問にお答えいただくという形で進めさせていただきます。それではよろしくお願いいたします。

【夢と希望を、そして喜びを与える職業野球人を迎えて】
川又米利氏

本日はお招きいただきましてありがとうございます。昔の映像を見ていただいて何だか恥ずかしい気も致します。見本になるような打撃だったのかどうかは分かりませんが、そう思っていただけたのであれば嬉しく思います。よろしくお願いいたします。

(以下、小森委員長＝小森、川又様＝川又)

小森:今年の高校野球での豊橋中央高校の頑張りについて、予選を踏まえどのような感想を持たれましたか。

川又: 愛知県で勝ち残るというのは相当力が無いと難しいことですので、夏の大会で初出場を果たしたということは素晴らしいと思います。甲子園ではあと一歩力及ばず敗退してしまいましたが、今後につながるような試合だったのではないかと思います。後輩達も甲子園出場という素晴らしい経験をしたと思いますので、また来年の夏を目指して頑張ってもらいたいです。自分も甲子園には 4 回出場しましたが、後輩の荒木大輔は 5 回出場しています。荒木のお兄さんが僕と同級生で、お兄さんと合わせると荒木の親御さんは 9 回甲子園に行っています。甲子園は勝たなければ出場できない場ですので、そういった意味では良い思い出になっています。

小森:中央高校の高橋大喜地投手のアントニオ猪木の顔真似パフォーマンスについて、高野連から注意があったようですが、それについてはどうお考えでしょうか。

川又:僕自身はパフォーマンスとしては悪いとは思いません。それよりも高野連の審判の誤審が多いことの方が気になりました。人間ですので失敗はあるのは仕方がないですが、選手達のことを考えると、しっかり見て欲しいと思います。

小森:川又さんは幼い頃からプロ野球選手になることを目標にされていましたか。していたのならば、いつ頃どのように意識されましたか。

川又:小学性の頃からプロ野球選手になりたいという気持ちを持ってやっていました。その頃は単純にプロ野球選手のユニフォームがかっこよく見えていて、あのユニフォームを自分も着たいという憧れから、そう思っていました。高校の三年間は学校での練習が終わった後に、更にリトルリーグの監督の家に通って練習をしていました。その成果があったらこそ、プロになることができたと思っています。親にも感謝しています。

小森:早実時代の思い出を教えてください。

川又:一年生の秋に都大会で優勝し、明治神宮大会にも勝ち、そのご褒美だったのかどうか分かりませんが、正月に台湾遠征に行ったことが記憶に残っています。それとやはり甲子園に 4 回行くことができたことです。3 年生の秋、野球部を引退して、初めて学校の文化祭に参加しました。当時は男子校だったので、

その時は女子生徒が大勢来ていたことも記憶に残っています。
小森:二日後にドラフトがありますが、川又さんは当時、ドラフトにはかかりませんでした。ご自身はドラフトにかかると思っていましたか。
川又:当時のドラフトは一球団4名と決まっていました。それ以外は皆、ドラフト外で入団ということになります。元々プロに行きたいという願望もあり、スカウトの方が学校の先輩だったこともあって、ここだけの話ですが内々で話が進んでおり、ドラゴンズに入団できるということになっていました。そして他球団からの指名を避ける為に大学に進学すると一旦公表しておいて、ドラフトが終わってからやはりプロへ行くということにして、中日に入団したということになります。
小森:次に「ドラフト後に中日から声がかかった時の気持ちは」と質問する予定だったのですが。
川又:前々から決まっていたので順番はちょっと違いますが、声を掛けてもらった時はやはり嬉しかったです。僕の同期入団に同じ年の栗岡英智という選手がいました。彼は中京高校の出身で、甲子園はベスト4、ドラフト2位。それに対して僕はドラフト外という立場の中で、彼には絶対に負けたくないという思いで入団しました。球団が彼と僕の年棒を同じにしてくれたことは嬉しかったです。
小森:入団後は、中利夫監督、近藤貞雄監督、山内一弘監督、星野仙一監督、高木守道監督と、5人の監督の下でプレーされましたが、それぞれの監督の思い出などについて教えてください。
川又: 僕は一年目の 5 月から一軍に上がりました。中監督には入団してすぐに使ってもらえて、とても感謝しています。近藤監督には代打として使ってもらえました。これからという時に結果が出せず、宙ぶらりんな状態になっていたところで山内監督に代わり、監督の熱血指導を受けました。理解するのに苦しみながらも色々と教わりました。

山内監督の時、自分自身は 7 年目のシーズンの時に、田尾安志選手がトレードになり、ライトのポジションが空きました。当初、山内監督は藤王康晴をライトで使いましたが結果が出ませんでした。僕はその時も代打で出場しており、北別府学投手からホームランを打ったりと状態としては良かったので、途中からスタメンで使ってもらえるようになりました。一試合目は結果を出せませんでしたが、次の試合ぐらいから結果が出始めました。その年は 130 試合中 123 試合に出場して規定打席にも到達し、最終的に2割9分という成績を残すことができました。

それまでの 6 年間は調子に波があり、後半へばってヒットもなかなか打てなくなるような状態でした。残念ながら 3 割には到達できませんでしたが、2割9分で HR9 本という成績を残すことができ、年棒も倍増しました。この頃から自分の立ち位置が確立でき、「プロ野球選手になった」と実感するシーズンを迎えることができるようになりました。

星野監督は 39 歳で監督に就任されました。星野監督と僕は現役が 4 年かぶっています。星野さんは選手の時も監督の時もあまり変わりませんでした。選手時代から監督のような雰囲気を出しており、声を掛けられたら直立不動になるような感じでした。86 年の秋、監督に就任された時には一言、「覚悟しておけよ」と言われ、その言葉の通り、死ぬほど練習をやらされました。秋季練習はこの頃が一番厳しかったと思います。しかしその甲斐あって、チームは前年の B クラスから就任年度には 2 位、その次の年には優勝という結果を残すことができました。僕自身も優勝が決まったヤクルト戦で、宮本賢治投手から 3 ランを打つことができて、非常に良い思いをしました。

星野さんが監督になられてから野球のシステムが変わったような感じがしました。相手チームではなく、ベンチと監督が戦っているような感じでした。ゲーム後には勝ち負けに関係なくミーティングが開かれるようになりました。試合に勝ったにもかかわらず、ミスをした選手が怒られて、負けた後のような雰囲気になったこともありました。

高木監督は星野監督とは正反対の地味な印象ですが、星野監督に負けず劣らず気の短い方でした。高木監督時代には 94 年の 10.8 決戦がありました。この時、僕は選手会長を務めており、試合開始前には巨人を倒して絶対に優勝すると意気込んで球場に向かいました。選手は午後2時くらいから練習を始めますが、普段はその時間にはお客さんはいません。しかし最終戦で優勝決定戦ということで、外野の外も人であふれてしまっており、中に入れるしかない状況になっていたそうです。練習の時から外野席が人でいっぱいになっており、びっくりしました。球場の隣にあるマンションの屋上にも人がいたりして、本当にすごい状況でした。ご承知の通り、結局は巨人に敗れ、長嶋監督の胴上げを見ることになりました。

この年の夏頃から高木監督が退任するという報道がありました。このまま負けて高木監督が去るというのがとても辛く、自分達が何か言える立場ではないということは承知しながらも、「監督、もう一年やりましょうよ。この鬱憤を来年晴らしましょう」という気持ちで後輩の仁村と彦野を連れて監督室へ行きました。高木監督からは「お前達の気持ちは有り難い」というような言葉を頂きましたが、結局決めるのは球団、オーナーです。どうなるのかと思っていましたが、結果的には高木監督にもう一年やっていただけるということになりました。

ただし、次の年に星野さんが監督に就任するということが内々に決まっていたらしく、星野さん的にはあまり良い気がしなかったのではないかと思います。星野監督の下でのスタッフもある程度決まっており、彼らは 2 軍でその次の年に備えるような形になりましたが、ちょっとやり辛い状況だと感じた 95 年のシーズンでした。

結局、チームも良くない状態で、高木監督はシーズン途中で休養という形となってしまいました。僕達がしっかり仕事ができなかったせいでそのようなことになってしまい、非常に残念でした。甲子園での試合の前のミーティングで、高木監督から「自分は今日が最後だ」という話があり、今日は何が何でも勝たなければいけないという気持ちで甲子園に乗り込みました。ところが当の監督が審判への抗議で途中退場になってしまい、そのまま名古屋に帰ってしまうという、少々残念な終わり方となってしまいました。

次の年にはまた怖い監督が帰ってきました。この年はドラゴンズが 60 周年を迎えた年で、優勝争いはしましたが、またも巨人にやられて長嶋監督の胴上げを見ることになりました。

僕は第 2 次星野監督時代に引退しました。引退会見に星野監督に同席していただけたことは、本当に光栄なことだったと改めて思います。お世話になった 5 人の監督は、残念ながら皆さん鬼籍に入られてしまいました。僕としては良い監督の方々の下で 19 年やれたと思っています。

星野さんの後任の山田久志監督の時、コーチとして 5 年振りに現場に戻ることになりました。山田監督の下で 2 年間、落合監督の下で 1 年間、合計 3 年間コーチを務めました。落合政権の時のドラゴンズは強い時代でしたので、ファンの皆さんも見ていて楽しかったと思います。

野球選手はやはり現場が好きで、心の中では皆、現場で指導することを狙っていると思います。その中でもプロ野球の監督は 12 人しかなれません。誰もが一度はやってみたいポジションなのではないかと思います。

今年ドラゴンズが久々に最下位を脱出しました。立浪監督も一生懸命やってこられたのですが、結果最下位が 3 年続き、辞任することになりました。今年は井上監督の下、もう少しで

Aクラスというところまで行きましたので、来年こそはAクラスに上がって欲しいと思います。
小森:打撃コーチ時代のお話もありましたが、教えること、管理すること、気分を乗せることなどで苦労した点は何でしょうか。
川又:飴と鞭ではないですが、褒めたり、怒ったり、乗せながらやらせるということも大事なのではないかと思います。怒るだけでは選手はへこむだけなので、怒ることもありながら褒めることが大事だと思います。
小森:理想とするコーチ像、理想とする監督像、もしご自身が監督を務めるのであればどのような監督になりたいかについて教えてください。
川又:監督としては、スタッフが自分のやろうとしている野球に対して向かっていってくれるということが理想だと思います。また、監督よりも先に選手に怒ってくれるスタッフがいてくれると良いと思います。監督は怒ってはいけないとは言いませんが、先に部下が怒ったり褒めたり乗せてあげたりして、チームを盛り上げていくのがベストではないかと思っています。今は怒るだけでは駄目だと思いますので、そのあたりが難しいところかなとも負います。
小森:同期就任の立浪監督と新庄監督ですが、結果に大きな差が生じました。両名を比較して、どの点がどのように違って結果がこのようになったのか、どのように思われますか。。
川又:非常に難しい質問ですが、やはり新庄監督の思いをコーチ陣がしっかりやっているということがあるのではないかと思います。また、立浪監督は監督自身がものを言うということを聞いたことがあるので、それを監督にやらせては駄目だということは感じました。
小森:第1次星野政権下でライトフライを後逸し、3塁打にしてしまって交代となりました。その時の心境はどうでしたか。
川又:記憶にございません(笑)。
小森:それでは同じく星野監督時代、ヒットを打った時に相手がエラーをして、2塁まで行けるチャンスがあったにもかかわらず、味方のホームインに見とれてしまって進塁できなくて、星野監督が激昂して扇風機を破壊したということがありました。この時はどのような心境でしたか。
川又:記憶にございません(笑)。ただこの時は9回2アウト2塁という状況で、僕が凡打だったらチェンジで負けていた試合でした。ヒットを打ったのだから褒めて欲しいというのが正直なところです。通常、ライト前に打ってボールがライトからホームへ戻ってくる場合、打者走者はホームにボールが投げられた瞬間にセカンドに行かなければいけません。しかし僕は思わずランナーを確認してしまい、セーフになったので「やった！」という気持ちになっていたのですが、ベンチを見たら指をさしてこちらを見ており、周りのコーチ陣も「あいつ何やってるんだ」という感じになっていました。「これはまずい、ベンチに帰れない」と思いました。最終的には広橋公寿選手がサヨナラホームランを打ってくれて勝ったので良かったです。
　途中で変えられるというのは非常に酷です。イニングの間に交代だと言われ、ベンチで叱責され、「二度と使わない、とっとと帰れ！」と言われたこともありました。ただここで本当に帰ったら明日からは2軍だろうと思って、ベンチに残って最後まで応援を続けました。次の日もスタメンで使ってくれました。1988年の日本シリーズの1戦目、僕はスタメンではありませんでした。代打で出場して四球になり、そのまま守備に入れと言われました。打球をスライディングキャッチに行ったのですが、打球は股間を抜けていきました。その時も怒られたと思います。でも次の日の第2戦では、スタメンで3番ライトで出場し、2ランホームランと決勝打につながる2塁打を打って賞金10万円を貰いました。
小森:プロ野球選手になって良かったこと、辛かったことは何でしょうか。
川又:まず1軍に定着して19年やれたことは非常に良かったと思います。1年目は5月に1軍に上がって最終戦まで行き、2割7分7厘の成績を残し、年棒も上がりました。しかしその年の秋季練習初日に腰を痛めてしまい、そこから6年間は非常に波があって行ったり来たりすることになり、この時が一番つらかったと思います。当時の球団通訳の方が僕の父親と同学年で、かわいがってくれていたこともあり、親身になって治療に付き合ってくれました。そのお陰で次の年のキャンプには間に合いましたが、結果的にはあまり良い成績は残すことができませんでした。1軍に定着できない、後輩達に抜かれるという悔しい経験をしました。やはり嬉しいのは優勝や1軍で打ったことで、そういったことは今でも記憶に残っています。僕はサヨナラヒットを1回しか打ったことがありません。サヨナラホームランと満塁ホームランも1軍ではありませんでした。こういったことは心残りです。
小森:ファンとの接点で嬉しかったこと、悲しかったこと、辛かったことはありますか。
川又:ヤジが飛んできた時には、やはり腹も立ちます。ナゴヤ球場時代は客席と近かったこともあって、駄目な選手には容赦なくヤジが飛んできていたのできつかったです。逆に代打でグラウンドに出ていくときの歓声は何とも言えず、非常にやる気が出ました。仮に自分の状態が悪くても、打たせてくれそうな雰囲気にしてくれる歓声でもありました。

【ロータリー情報委員会講評】　岡本敏幸R情報委員長

今日のフォーラムは大変楽しいフォーラムでした。私も現役時代の川又選手を見ていましたが、今も非常に若々しく、昔と余りお変わりがないように感じます。星野監督はテレビ中継でも怒ったり、ベンチの物を壊したりする様子が流れていましたので、すごい監督が来てどうなることかと思っていましたが、結果的に優勝もしていますので凄いと思っております。私も父親の影響で、小学生の頃から中日を応援していましたが、3年連続最下位になった時はファンを辞めようかと思いました。今年、漸く4位になって、少し希望が出てきたかなと思います。川又さんにはOBとして、これからのドラゴンズを引っ張っていっていただいて、昔の様に強いチームにしていっていただければと思います。来年こそは頑張っていただきたいと思います。本日はありがとうございました。

監修・発行	会場委員会
写真撮影	会場委員会